

巻頭言 IFCS-96を終わって 林 知己夫
 待望のIFCS-96は多くの海外からの参加者をまじえて、1996年の3月27日～30日神戸・国際会議場で有意義に終わることが出来た。この開催のため、分類学会は熱心に取り組み事務局として、プログラム委員会として、多大の努力を傾けてきた。とくにLOCと呼ばれるローカル組織委員会は文字通り全力投球であった。おかげで参加した内外の多くの研究者から「素晴らしい内容と運営」という言葉をいただいた。責任者として関与された方々に深甚の感謝の意を表明したい。

この詳細な次第やその後のチュートリアルセッションについては会報で述べられるし、発表された論文の内容についてはProceedingsとしてSpringerから1997年に出版されることになっているのでそれをみていただきたい。

このIFCS-96はData Science, Classification and Related Methodsが全体のキャッチフレーズになっている、この“データの科学”というところがポイントである。これは、我々とフランスのグループの日仏セミナーにおいて考え出されたものであり、“データによって現象を解析し理解する”というのがその骨子である。これは当然、データのデザイン、データの収集、データ分析を含むものでそれを統一的理念で考えるということである。これは、統計学、データ解析、分類、その他の諸方法を含むものであるがデータによる現象解析という目的において一貫したものである。一例をあげよう。従来は標本調査といえば平均値の推定が中心であり、分析は統計的推定論、検定論を念頭においたものであった。しかし、今日では推定論や検定論を超えてデータの解析や分類の方法が進み現象にくい入る解析が出来ようになった、こうなると、これを念頭においた標本調査計画が考えられるならばより情報が豊になる。このためにユニヴァース（複数）をどのように取りあげるか、質問票をどのように構成したらよいかの理論が進むことになる。つまり従来の考えでは進めなかったところが打破されbreak throughが出来上がってくる。ここがData Scienceの概念の重要性である。45分の基調講演は、各国分類学会から一つ宛ということで構成されたが、この中には新しい動向を示唆するものが多々見られ、また、分析の妥当性が意識されているものがあり嬉しかった。Invited Sessionのみでなく、Contributed Sessionについても、理論と実際がよく噛み合ったものがあり将来性を強く感じる事が出来た。

なお、IFCS-96の参加者に特色があった。外国の場合でも常連のほかに、新しい顔触れが多くあったことや国内からも従来殆ど接触のなかった協賛諸学会からの参加のあったことは、今後のことを考えると学問の発展上意義のあることであった。しかし、一方極めて関連の深いと思われる諸学会や諸機関からの参加者が意外に少なかったのは驚きであった。学問の分化が進むにつれて専門分野の細分化が行われ、この中での研究者が他の新しい領域の発展に関心を示さなくなった傾向の現れでなければ幸である。

分類学の新しい展開はいかにあるべきか。必ず方法の妥当性を求め、データの科学の文脈において、多くの種類のデータのまにまに新しい方法を発展させてこなくてはならない。このためには、開いた心を持ち、高い視点・広い視野に立って、多くの分野との接触を深め各分野固有の方法と目的を理解し、率直な態度で、手を携えて進む必要がある。これによって各分野でも「目の鱗」が落ちることもあり、私の分野の「目の鱗」も落ちることもある。これが各分野、該当分野の局面転換の創造的研究に連なり正にイノベティブな雰囲気をかもし出すことになる。これが大事なのである。IFCS-96の開催とProceedingsの発行が端緒となり新しい動きが強まることを期待してやまない。

なおIFCS-96の開催にはプログラムに記載してある多くの機関のご協力はもとより多くの有形無形のサポートをいただいた。これなくしては開催不可能であった。また多数参加いただいた方々のご協力も忘れられるものではない。厚く御礼申し上げる次第である。（大会組織委員長、日本分類学会会長）

< 本号に掲載の記事 >

- ・巻頭言「IFCS-96を終わって」 林 知己夫
- ・「IFCS-96大会報告」雑感 - 大会うらおもて - 大隅 昇
- ・「IFCS-96大会報告」(参加者数, 決算他) 大隅 昇
- ・「インターネット接続記」 林 篤裕
- ・「チュートリアル・セッション印象記」 大隅 昇
- ・IFCS-96大会関連情報
- ・通常総会記録 平成7年度総会
- ・運営委員会記録 平成7・8年度(第1回)
- ・幹事会記録 平成5・6年度(第10回, 第11回)
- ・会計報告
- ・平成6年度決算書 / 平成7年度予算書
- ・平成7年度決算書 / 平成8年度予算書
- ・第12回研究報告会記録
- ・IFCS関連委員会報告(第10回～第20回最終)まで、抜粋要約その他
- ・他学会だより(IFCS-98ローマ大会他)
- ・日本学術会議関係報告
- ・事務局から

「IFCS-96大会報告」雑感

- 大会うらおもて -
大隅 昇 (統計数理研究所)

1. はじめに

IFCS-96大会を終えて早くも1年半余が過ぎた。記録とメモリアルの意味も込めて、敢えてここに記したい。また、ここまでの間、IFCS-96大会会計処理と論文集発刊に予想外の時間を費やすこととなり、JCS関連の事務処理がなおざりとなったということもある(ただお詫びするのみである)。しかし、大会会計処理も1年余で完了でき、またここにきて論文集の発刊も年内には可能となったことで、改めてここで会員諸氏への感謝の意も込めて、この会報をお送りする次第である。

2. 出発点

2年余の準備の下に、第5回国際分類学会議(IFCS-96)の開催に漕ぎ着けることができた。とにもかくにもIFCS-96大会は無事に終了を見た。これらを、時間軸に沿って、その“うらおもて”を改めて振り返ってみたい。また、この機会に、他にあまり例をみないであろう“大会裏話”を含めての報告としたい。

第5回国際分類学会議は、国際分類学会連合(IFCS)、日本分類学会の主催、文部省と日本行動計量学会の後援、それに21の関連諸学会の協賛を得て開催された。所帯の小さい学会からのお願いにも関わらず、多くの学協会の関係者からは非常に前向きのご協力をいただくことができたことは誠にありがたい限りである。

加えて、多数の機関、企業の方々からも多大なご支援を仰ぐことができ(後述)、成功裡に終えることができたことは、喜びに堪えない。

3. 大会開催前のこと

翻って思うに、エジンバラでのIFCS-91大会時に、IFCS第5回大会開催担当国としての名乗りをあげて以来、すでに5年余の時が過ぎた。この長いような、また一方では切迫と緊張の連続の中での準備期間を経て、どうやら大会開催にこぎ着けることができた。もともとが所帯の小さな学会連合体であるから、諸事項の決定や情報交換に際しては小回りが効くものの、肝心の財政面の手当についての組織化がもっとも大変であった。結論から申せば、林大会組織委員長があってこそ、この大会が実現をみたといっても良い。勿論、資金面以外の様々な局面での、組織委員会、実行委員会委員各位が一丸となつての多大な労力、ご支援あつてのことではあるが、率直なところ何よりもまず資金源の確保が当面の最大の課題であった。

ところで他の研究分野では、大規模な国際研究集会もそう珍しいことではない。しかし一つの学会単位ではなく、各国の学会が連合体を組

織して研究交流を行う例、とくにデータ科学・統計科学、データ解析関連研究の分野では、こうした例はまだ珍しいのではなからうか。そうした集會が、まがりなりにも5回目(10年目)を迎えることになったこと、またそれを日本で開催できるということは、きわめて意義あることと考えて、ひたすらここまで走ってきたというのが実感である。

さて、本大会は昨年(1995年)の3月27日から30日にかけて、4日間にわたって行われることとなった。会場となった神戸国際会議場は、1981年に開催のポートピアを記念して設立されたポートピア81財団に属する機関である。自治体が関与して設立されたこの種のコンベンション・センターは、最近こそ珍しくはないが、神戸はこの種の事業の先駆けとなったことで知られている。

また周知のごとく、1995年の1月17日、神戸市を含む阪神地区を襲った阪神大震災により、思いもかけない事態に遭遇することとなった。この震災の報を知り、これは大変なことになった、というのが正直な気持ちであった。このニュースの後、諸外国の方々からE-mailやファクシミリで次々と問い合わせや見舞いの連絡を受けた。ニュースは確かに世界中を駆けめぐったのであろうが、その報道内容には些か問題があったようである。多くの問い合わせは、東京近郊も含めての地震の影響がどうであったというもので、欧米から見れば、相変わらず日本ははるかに遠い東の国、小さな国との印象は否めず、情報の対等な双方向性が依然として成り立っていないことを強く感じた。

とにかく最悪の事態を想定して、急遽、他の会場の探索に着手したが、既に開催時期も迫ってきたことと、同様の対応を考える諸学会も多く、なかなか思うにまかせぬ状況が続く、これではいよいよ開催が難しいかと思われた。

しかし幸いなことに、その後、神戸国際会議事務局から、会場ならびに市内近辺の復活状況については、随時情報が提供され、また神戸市長からは神戸国際会議場の開催と神戸復活に向けてのご挨拶等もいただいた。会議場で開催予定であった多くの国際会議がキャンセルや開催場所変更を余儀なくされた中で、ぎりぎりまで待った結果、やはり神戸で開催すべきであるとの林組織委員長他の決断により、神戸での開催に至った。この諸過程での神戸国際会議事務局の適切な対応には大変に感謝している。

こうした不測事態に加えて、実行委員会、プログラム組織委員会の諸作業も遅れ気味で、それぞれがタイトロープを渡る気持ちの日々が続くという状況であった。加えて、発表者の論文到着の遅れからアブストラクトの印刷の遅延、各国参加者とのE-mailのやり取り、さらにはインターネット立ち上げへの技術的な問題の解決、...と際限なくジョブが膨らむなか、まさしく猫

のみならず鼠の手も欲しい状況であった。インターネットの立ち上げは、多くの国際会議では当たり前のこととなってきてはいても、我々が関与する分野ではまだ例を見ない状況であり、すべてが試行錯誤の連続であった。これの詳細は、担当の林篤裕委員の報告が後にあるのでこれをご覧いただきたい。ここでは担当をお願いした林篤裕、今泉忠の両委員に厚く御礼したい。

4. 大会開催直前

大会当日前日の夕刻からの参加者登録に備えて、またインターネット立ち上げ、コンピュータ・デモンストレーション会場設営などのことがあり、前日の26日からの神戸入りとなる。アブストラクト等の印刷も含めて、未確認の資料が多々あり、きわどい設営準備となった。コンピュータ・デモンストレーション会場設営、インターネット立ち上げについては、林篤裕、丸山直晶（統計数理研究所）のお二人をお願いしてあるので、問題無しと思ってはいても実際に稼働するまでは不安がないと言えば嘘になる。

会場に配置の各種のパネルの搬入。パネルに記載の文字が、普通のものよりもあまりに多いので（との業者の言葉があったが）、ミスが多発して、その場で修正液と切り貼りでの訂正が始まる。これを横目で見ながら、アイシーエス企画の滝澤嬢らとCarroll対応のための臨時措置である、演壇に上がるスロープ設置の確認、入り口からリフトを使っての移動線の確認等もシミュレートする。一方、神戸で動員をかけたアイシーエス企画関連者が集まり、受付の設営、コンピュータの設置、動線の確認等も始まる。

こうしてとにもかくにも何とか設営を終えたところで、早くも何人かの登録者が到着となる。自分の経験からも、早くに会場の様子を視察したいという気持ちは良く分かる。こうして、前日としては予想以上の多くの登録者を迎えることとなった。



<初日、会場受付風景>

5. 大会初日のこと

初日、Carroll会長がタクシーで到着。なじみの多くの顔も次々に受付に現れる。まずは、壇上に、Carroll会長、林大会組織委員長、Gordon前委員長、矢島SPC委員長、それにIFCS事務局

を取り仕切る（実に有能な）Meulmen女史が並ぶ。ここで、見えない配慮として、足が不自由なCarroll会長のために、壇上へのスロープを用意したが、これが問題ないかきわめて心配となる。

オープニング・セレモニということだが、参加した経験は何度かあっても、自らが執り行うのは、ごく小さな集会程度である。まあとにもかくにも、まずは馬場実行副委員長の司会により開始、林大会組織委員長挨拶、Carroll挨拶、それに実行委員長の大隅からの大会日程進捗の簡単な説明、とプログラムは淡々と進む。かくしてきわめて時間通りにオープニング・セッションを終えることができた（ここらは、アイシーエス企画の滝澤嬢の適切なプランのおかげ）。何か、これですっかりパワーを使いきった感じで、大変に疲れたが、頭の中は早くも、夕方のウェルカム・レセプションがうまく進むかにある。



<Carroll会長の挨拶>



<オープニング・セレモニ>



<林大会組織委員長の挨拶>

6. ウェルカム・レセプション

- 27日18時から20時頃、相樂園（神戸市） -

初日の夜は、主催者側のウェルカム・レセプションである。大会会場から、貸し切りバス数台で移動となる。このバス移動には、市内の震災被害を見て貰うという意図もあって、事前に通過コースを決めておいた。会場は神戸市内の「相樂園」である。ここは神戸市が運営する公園とその付属施設であり、その中にある会館を借りてのレセプションとなる。震災の被害後の修復が未だ完了しておらず、正門である立派な武家屋敷門や周りの土塀、それに園内の建物・和風庭園などを、参加者に十分に見ていただくことがかなわなかったことは誠に残念ではあった。会場の管理事務所からも震災後の対応が十分でなく、申し訳ないといった言葉をいただいたが、いかんせん予知不能の地震によるものであるからどうなるものでもない。

まず、矢鳥敬二SPC委員長の挨拶。ICS事務局担当の滝澤嬢の提案で、「日本酒の鏡割り」を密かに準備、これに各参加者への酒肴のサービス付きといった趣向で、オープンとなる。これにはCarroll会長、Gordon前会長、林大会組織委員長はもとより、参加者全員が満足していただけたものと自負している。また、鏡割りの後に、参加記念として各人にIFCS-96ロゴ入りの杉の「酒肴」が配られ、各人これで樽酒を飲むという趣向もなかなか評判が良かった。

こうしたレセプションでは、次々と関係者の退屈な挨拶が続くということが多いが、事前の相談でこうした時間は設けることはせず、参加者同士の歓談・交流に時間を使っていただくという方針を通じたことがよかったのかもしれない。



<鏡割り>



<ウェルカム・パーティの様子>



<歓談する参加者>

7. 日々の会場の状況

事前に会場をチェックし、設備や機器類配置、それに人の配置と、すべてをアイシーエス企画と打ち合わせのおかげで、各会場の進捗は何の問題もなく進んだ。唯一残念なことは、事務局担当者として控室にたえず待機せねばならぬことから、ほとんどの発表を聞くことができなかったことである。

発表会場が幾つかのフロアに分かれたことから、セッション間の移動に若干の問題がないこともなかったが、これは会場の構造上の問題とも言えるので、いかんともしがたい。プログラム作成時に、各セッションの分類と会場内の移動線の確認を行うことが精いっぱいである。また、会場の設立時期を考えると、既に築後20年近くも経過しているのので、最近の近代設備の整ったコンヴェンション・センターに比べればやむなきことではあった。

また、第2日目の午後にはパネルセッションが開かれた。このオーガナイザはスイス、ヌシャテル大学のDodge教授。大変に陽気な人で、話題も豊富かつアクティブな研究者として知られる。セッション・トピックスは“The Art of Classification: Past, Present and Future”である。予定していたメンバーが全員揃わず、Bock, Lebart, Nakmori, Rizzi, Van Cutsem, Vichiそれに司会のDodgeであった。この内容については、IFCS Newsletterにその要旨があるのでこれをご覧いただきたい。



<パネルセッション>

8. バンケット前のこと

バンケットでの最大の問題は、食事の内容を和洋中の何にするかであった。東京都心のホテルについては、若干の取得情報はあがるが、こと神戸となつては自分たちのテリトリ外ということで、皆目見当がつかないという事態にあった。とにもかくにも試行錯誤の結果として、西洋風でということで、会場となるポートピア・ホテルの担当者に、予算を呈示してメニューの提案を依頼する。

が、アイシーエス企画を介してのホテル側の対応を見て、これでは危ない、というのが実感であった。とにかく、こちらからの質問・問い合わせに対する回答が、いずれも的外れ、まるで結婚式の打ち合わせの呈といった内容である。おそらく最近では立食によるパーティーが多いので、着席による正餐方式のパーティーには慣れていないだろうとは予想はしていたものの、かなりの焦りを感じる。滝澤嬢も意は同じで、何らかの対応策を検討せざるをえなくなった。

こうなつては、遠慮や気配りをしてはままならぬと、知り合いのフランス料理店のシェフに電話をかけ、いったい通常はどう取り仕切るのが適切かの話を学習することとした。とくに大人数（好評で、既に定員枠を越えていた）をいかに捌くか、それにはどう対応できるのかといったことである。ホテル側が提案の幾つかの案を見るなりシェフの口から出た言葉は、これは結婚式ですね、まあ困ったものだ、といったようなことであった。

早速、シェフのアイデアを伺うこととする。彼は大きなホテルでの経験も豊富で、大人数に対応出来る調理法には限界があること、よってメニューの内容もそれに従わざるをえないこと、しかしその代わりというかワインは良いものを選択すべきであろうこと、...ときわめて合理的な提案が得られたことに驚くと同時に、これはデータ解析そのものの心得に通じるところあり、と感心して聞き入った。とくに、ワインについては、内証であるがとの断り付きで、料理に合い、しかも誰もが納得するクラスのワインを、レストラン仕入れ価格で調達してくれることとなり、何とその場で、サッと注文まで済ませるという手際良さ、ここでまたシェフとは有能なマネージャーのことを言うなり、と感心する。こうして、差し迫った中での最大の問題がクリアされた。

9. バンケットのこと

開場前に、リハーサルを行う。アトラクションを幾つか行ったりするので、こうしたリハーサルと進捗確認が必要とのこと。司会をお願いした田中豊SPC副委員長と滝澤さんの打ち合わせを横で拝見する。こうした体験も初めてのことで、大変に興味あり。あわせて、レストラン

のソムリエとワインの扱い、出し方のタイミング等についての打ち合わせを行う。ソムリエから、揃えたワインの銘柄と試飲（ソムリエの役割）についてのほめ言葉を貰う。半分はお世辞としても、やや安心。

そして、バンケットの開始。ドリンク・サービスが開始されたが、それより前に、早くも会場前に集まってきた諸氏もある。そして、いよいよ、バンケットとなる。田中委員の流暢な英語で始まる。オープニング・パフォーマンスの生田神社の巫女による乙女舞が演じられる。

続いて、主催者側の挨拶で、林知己夫大会委員長がショートアドレスを。さらに、神戸市から市長代理として臨席いただいた大塚辰美理事長・神戸市経済局参与のご挨拶、さらには、IFCS会長Carrollの挨拶、前会長Gordonの挨拶と乾杯の音頭取り、ゲスト挨拶のDidayと続く。また、大塚理事長から、神戸市での大会開催を記念して、Carroll現IFCS会長、Gordon前IFCS会長に、それぞれ財団記念品（屏風のレプリカ）が贈呈された。

食事の方も、問題のワインの出し方も予定のマニュアル通りに進んでいる。何か、放送のビデオ収録の場面などを思い出してしまう。同じ卓に座ったLebartやVan Catsemが、料理はなかなかであるとのコメントで少しホッとす。大勢の人数であることからメニューが限定されてしまうというハンディキャップもあるので、とにかく無事に出てくることを祈るのみ。あちこちの卓からワインについての感嘆の声、囁きが聞こえてくる（このシナリオは成功したようだ）。ちなみに用意したワインは3種類で、Puligny Montrachet（1993）、Balestard la Tonnelle（1985）、Gevry Chambertin（1991）である。



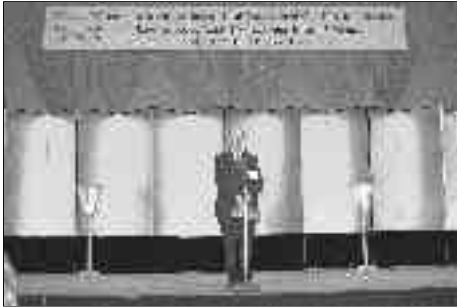
<生田神社巫女のパフォーマンス、生田舞>



<林組織委員長挨拶>



< Carroll , Gordonの挨拶 >



< 宴席歓談の様子 >

会食が進み、次のアトラクションである生田神社の巫女による生田舞が披露される。踊りは良いのだが、神官による解説があまりよろしくない。そして、次期開催国イタリア代表として、Rizzi氏の挨拶があった。そして、歓談、食事続行と、ほぼ予定通りにバンケットは進む。

まあ、あとは当日の料理の出来映えとワインの扱い方の問題だけ、ということで、些か心配もあったが、宴会が進み、料理とワインが出てきてからの出席者各位の顔を伺う限りはどうか合格ラインに到達したらしいという安堵感を感じる。事前に、林組織委員長から、バンケットの成否が大会の成否にも通じること、そして、食べ物の恨みは恐いぞ、といった指示もあったのだが、どうやらこれはパスできたらしい。



< 大塚辰美理事長から記念品の贈呈 >



< Diday , Rizziの挨拶 >

10. 最終日

どうやら大会開催中は天候にも恵まれ無事に終えられそうで安心する。最終日ともなると、観光に移動する者などもあって会場は些か閑散となってくる。事務局控室に待機のメンバーも何やら暇な感じとなってくる。期間中とくに問題なく稼働してくれたインターネットの設営も、NTTとの接続契約の決められた時間となり終わりとなる。

この他、裏方のこととして、IFCS Council Committeeの開催準備、その設営管理の手配等々、様々な事があったが、始まってみるとアツという間に終わりを迎えるという感じである。会場を借りた契約の関係から、すみやかに会場の整理を行うこととなる。会場の撤収作業を終えてから、アイシーエス企画の滝澤、穴澤、田中の3嬢、それに馬場氏ともども神戸市心に移動し

て、打ち上げの会食をとる。とにもかくにも無事に終えることができたことを皆で祝って乾杯となる。

IFCS-96大会報告

ここで、今大会についての主な統計資料を整理したので、これを記しておく。

1. 参加者の分布

参加者の国別の分布を調べてみた。これをまとめると別表のようになっている。当初は、ほんの数カ国からの参加に止まるのではないかと懸念されたが、幸いかなり多くの国からの参加を仰ぐことができた。とくに、東欧圏を含む欧州圏からが多く、また韓国からの参加は大変にありがたかった。なお、韓国分類学会は本大会中に開催されたIFCS Council Committeeで承認され、新たにIFCSのメンバー国として加わることとなったことは喜ばしい限りである。

IFCS-96 Number of Participants

(As of March 31, 1996)

| Country | Abroad | | Domestic | Allgemeinbund |
|--------------|--------------|------------|-----------|---------------|
| | Registration | Attendance | | |
| Belgium | 7 | 7 | 1 | |
| France | 15 | 19 | 1 | 1 |
| Germany | 7 | 7 | | 1 |
| Italy | 8 | 7 | 2 | |
| Japan | 112 | 115 | 11 | 3 |
| Spain | 5 | 3 | | |
| Switzerland | 2 | 3 | 2 | |
| U.S.A. | 12 | 13 | 2 | 3 |
| South Korea | 20 | 18 | 18 | 19 |
| Total | 201 | 216 | 26 | 19 |

<表> IFCS-96参加者状況一覧表

2. 大会決算報告

こうした国際会議でもっとも苦慮することが、会議の運営費用の調達と運用である。今回もこの例に漏れず、事前の集金活動が大変であった。しかし、多くの企業や団体からの多大なご賛同を得て、何とか乗り切ることができた。ご協力をいただいた下記の各企業、機関、団体に対して心から御礼申し上げたい。

- 関西電力株式会社
 - 原子力安全システム研究所・社会システム研究所
 - (社)新情報センター
 - 住宅金融公庫(住宅総合調査室)
 - (社)中央調査社
 - (株)電通
 - 東京電力株式会社
 - (株)日経リサーチ
 - (財)日本交通公社
 - 日本たばこ産業株式会社
 - 日本万国博覧会記念協会
 - (財)日本労働文化協会
 - (株)日立製作所(公共情報営業本部)
 - (株)ビデオ・リサーチ
 - (財)ポートピア81記念財団
 - (株)マーケティング・サービス
 - (社)輿論科学協会
 - (株)リサーチ・アンド・ディベロプメント
- (以上、五十音順)

こうしたご協力いただいた各位、また参加者各位へのご報告の意味を含めて、今大会の決算報告書を掲載しておきたい。また、国際会議と呼ぶに相応しい集会を開催するには、この程度の経費が必要とされるという意味での参考情報となれば幸いである。

3. その他のこと

1) TEX, 電子ファイルによるアブストラクトの収集

大会の事務運営をお願いしたアイシーエス企画のE-mail利用環境の立ち上げの遅れから、各参加者や発表者との情報交換にE-mailが有効に利用できず、一時は立ち往生の状況にあった。しかし、1996年の秋になってやっと各参加者とアイシーエス企画、実行委員会（統計数理研究所内）との相互間の情報授受がE-mailで可能となった。アブストラクトの作成フォーマットとして基本的にLaTeXを用いることとしたが、このことから他の学会では標準となっているLaTeX用テキストファイルのE-mailによる送信の例が多数あり、これのコンパイルと出力に追われることとなった。受入体制がしっかりと組織化されている場合は問題ないが、我々のようにマンパワー不足の中で、この種の対応はなかなか大変である、というのが偽りなき実感である。加えてファイル転送のコード対応や方式、メーラーの差違等の問題から必ずしも円滑には進まないという貴重な体験をした。

2) IFCS-96Webページのオープン

IFCSの大会としては初めてWebホームページをオープンした。幸いアルバイト学生に器用な者がいたことで、アナウンスメントに記載の情報のすべてと、日本観光振興会、長野県、沖縄県等の自治体のホームページをリンクして、日本の紹介を兼ねたアクセスを可能とした。初めての経験で戸惑いや期待通りに機能しないことなどもあったが一つの実験的試みとしてはまあまあ成果であったと思う。

3) 謝辞

今回の大会運営に際しては、まるで曲芸飛行のようなきわどい対応の連続であった。1995年の秋になっても具体的なプランの策定がままならず、1995年の年末になってやっと目途がついた。アイシーエス企画の滝澤、穴澤の両嬢には、中途からマネジメントの全てをお願いし、かつあれこれと細かい注文を付けることになった。このすべてに的確な対応、対処を進めていただいたことにただただ感謝するのみである。また、データベース作成他の裏方作業を支援していただいた田中嬢にも感謝している。とくに、アイシーエス企画においてE-mail環境がいつから利用できるか、が一つのポイントであったが、かなり遅れたものの9月にこれが可能となり、ホッとした。同時にこれのオープンで、アブストラクトのやり取りが円滑になり急速に情報授受が進んだ。同時に、忙しさも加速され、もっとも

多いときには、一日に6, 70通ものメールの授受が発生した。

インターネット接続体験記

林 篤裕 (大学入試センター)

阪神・淡路大震災から1年以上を経過した神戸は、表通りを歩く限り惨状の爪痕もほとんど感じられず、見かけ上は以前のような坂と港の異人館情緒を漂わせた街に戻っていた。このような中であって、第5回国際分類学会議は、各国から多数の参加者を迎えて盛大に開催された。会議自体の報告は別の記事にあるので、ここでは私の担当したコンピュータ・デモンストレーション設営とインターネット接続立ち上げに関連した事項についての報告を行いたい。

海外の学会に参加した経験でも、コンピュータルームを解放してくれた機関も多くあり、参加者が自由にパソコンを利用することができたという記憶がある。自分が開発したソフトウェアのデモを行う参加者もいたが、パソコンがネットワークに接続されていたこともあり、多くはインターネット、とくに電子メールの利用が活発であった。私も電子メールの送受信を利用させてもらい、大いに重宝したという記憶がある。

このような自己体験から、国際学会の開催に際してはインターネット利用が可能な環境を整えることが一つの標準になるのではないかと頭の中では考えてはいた。そのような折、IFCS-96の準備委員会があり、このことを提案したところ、その設営係を仰せつかることと相なった。とは言え、ネットワークについてはまだ素人であり、多くの方のご協力を得ながら準備を進めることとなった。今後、この種の集会にあたって、参考になるのではないかと考え、この機会を利用して、一体どの様な点が問題となり、何を準備したかを、時間経過を追って要約してみたい。また、こうした貴重な体験が、今後こうした類似の学会の運営時に多少なりとも役にたつのではないかと、との心積もりもあるので、これを機会にできるだけ詳しく書いてみたい。

1) 会場の設備

まずは、どの様な設備やレイアウトの中で開催されるのかを把握するために、開催4ヵ月前(11月下旬)に会場となる神戸国際会議場の下見を行った。大小の会議場が4フロアーに配置されているこの施設は、建築から大分時間が経っており、建築設計時に、計算機やネットワーク利用に十分な配慮がなされているとは言えず、しかも改造計画進行中であった。また、その進捗状況から、3月までに間に合うかは微妙な状況にあった。

とくに、コンピュータの利用には、ある程度の電力が必要になるが、会議場として準備されている現状の電源容量では全く不足することが判った。そこで、1セット(パソコン本体とCRT)当たり1KW程度を見積もって、期間中という限

定付きで増設してもらうことにした。なお、プリンターは電力を必要とするので事務局で必要とする分以外には基本的には配置しないことにした。さらに、コンピュータ・デモンストレーション用のブースは、パソコンの設置以外に、ポスターの掲示やパンフレットの配布も行うので、広めの机2つとパネルを用意した。

2) インターネットへの接続方法

下見の時に同席してくれたNTTの担当者のお話では、インターネットに関するサービスは回線のレンタルだけで、どこに接続するか等の手配すべてを主催者側で用意せねばならぬことが判った。ただし、64KBまでの回線であれば大がかりな工事無しで会場まで引けることも判った。

学会や各種展示会で短期に限定したネットワークの接続を提供している業者があるのではないかと予想して、いくつかあたってみたが芳しい回答は得られなかった。また、神戸近郊の大学関係者に接続先を提供してくれそうな所を探してもらったが、こちらも見つけることは出来なかった。

他には、会議場を管理運営している神戸国際交流協会に回線の借用を打診したり、自分の研究室で運用しているモデムに接続するという方法等も考えたが、後者は電話代が相当必要だろうと言うことが予想された。そこで、NiftyServeが提供しているPPP接続を使って回線を確保することにした。神戸市内に14400bpsのアクセスポイントがあるので、電話代は市内料金で済み好都合である。ただ、Niftyの課金をどの様に清算するかを検討する必要がある。試験的に接続してみてメール等の送受信には使えるところまで確認し、電話回線も手配した。

ところが、会議があと2週間と迫った3月11日になって、学術情報センター（SINET）の内田氏より「神戸大学との接続を手伝ってもよい」旨のお申し出を、統計数理研究所の丸山先生経由で頂いた。加えてありがたいことに、接続に必要な機材はお二人からお貸しいただけることであった。しかし、これらを運用するにはINS64の回線を確保することが条件であった。この回線をひくには3週間は余裕が欲しいと事前にNTTから言われていたので、非常に不安であったが、NTTの担当者の献身的な努力・ご理解により、何とか回線を用意してもらえそうな目処がたった。

3) コンピュータの手配

コンピュータ・デモンストレーション用にパソコンを持ち込むことも考えたが台数や機種をそろえる事が困難なので、レンタルとした。いくつかの業者に問い合わせた条件の良いところに決めた。年明け頃から具体的な折衝に入り、DOS/VとMacintoshを合わせて10台程度借りるよ

うに準備を進めていた。また、英語版のOSも用意しようと考えたが、業者が取り扱っていなかったもので、英語版は用意できない旨をデモンストレーション申込者に案内しておいた。ただ、非常に困ったのは、使用機種・OSやキャンセルを連絡してこない一部の参加者がいる事であった。そのために最後まで台数が確定できなかった。

また、インターネット用には、Windows95を搭載したDOS/Vパソコンを使う事にした。Windows95がネットワーク関係のツールをデフォルトで持っており、別途ソフトウェアを用意する必要がなかった事と、フリーウェアが用意しやすかったからである。

前述のように、直前になって急拠インターネットの接続が可能になったのでそのための機材として、ワークステーションを追加した。しかし、このマシンは事前に調整をしていなかったもので、在庫の確認から手配まで期日に間に合うか不安であった。しかしこちらも、運良くリクエストした機種を用意してもらえ事になった。なお、ワークステーションについては、ソフトウェアの設定を行ってもらう必要があったので、事前に借り出して丸山先生に送り、設定後神戸に送ってもらった。

4) セットアップ

きわどいことに、会議の始まる前日に計算機の設定となった。コンピュータ・デモンストレーションについては、デモンストレーターの割り当て表を作り、該当機種をブースに設置した。



<コンピュータ・デモンストレーション>

インターネット用のワークステーションとパソコン（2セット）は、参加者の利便性を考えて受け付け横の一角に設置した。SINETからお借りしたインターネット用の機材とワークステーションは丸山先生の所で接続テスト済みであった。また、接続手順の丁寧な解説書を書いていただいていたので、これに従って注意深く接続した。間違いがない事を確認後、電源をいれると、危惧に反してあっさりとインターネットに接続できた。何らかの障害が発生する事も覚悟していただけに、拍子抜けすると同時に非常に嬉しかった。